

マンハッタンの漢方セミナー

今年の初夏の頃、ニューヨークにおいて漢方の講演会が2つ行われた。今回はその様子をご報告して、米国で漢方がどのように受け止められているかの一端をお伝えしたい。

1つ目の講演会は Honso USA からのニュースレターで知った。本草製薬の米国子会社である Honso USA が、マンハッタンで医療専門家向けの1日漢方セミナーを行うという。興味を引かれたものの、参加費が100ドルと高額で申し込みをためらっていたところ、ニューヨーク医科大学病理学の Sheshadri Narayanan 教授から、いっしょに参加しないかとお誘いを頂いた。Narayanan 先生は東西の植物療法について本を書こうとしており、ぜひその参考にしたいと言う。そこで Honso USA の社長を務める Dan Wen 氏にご相談したところ、ありがたいことに先生と自分が聴講できるようお手配くださった。

さてセミナーの当日、どんな講師がどんな聴衆に何を話すのだろう、と興味津々で早々と出かけていった。会場はマンハッタンのフラットアイアンビルスの近く、鍼灸大学 Pacific College of Oriental Medicine の1教室である。この大学は米国でも指折りの鍼灸大学で、以前その付属病院に鍼灸治療を受けに通ってみたこともあり、場所はなじみがある。

朝8時30分頃会場に着くと一番乗りで、主催者側はまだ準備の最中だった。Wen 氏を見つけお礼を言うと講師の先生に引き合わせてくれた。講師は Nigel Dawes 氏、Pacific College of Oriental Medicine の教授で鍼灸師のライセンスがある。氏はイギリスの出身で、ケンブリッジ大学で修士の学位を取得し、その後日本と中国で東洋医学を学び、現在ニューヨークで東洋医学の教育と診療を行っている。日本では丁宗鐵先生の弟子にあたる北里の先生から漢方を学んだという。

医療専門家が熱心に聴講

やがて聴衆が集まってきた。見渡すと全部で20数人、男女はおおよそ半々、年齢は学生らしい人から60代の人まで均等に分散している。アジア系は自分を含めてわずか3人しかおらず、残りは白人と黒人が半々。100ドル払って漢方のセミナーを聞きに来るのはどんな人々かと非常に関心があったが、幸い Dawes 氏が講演の始めに出席者に専門を尋ね自己紹介を促した。職業は鍼灸師が最も多かったが、看護師、栄養士、薬剤師、学生と様々で、医師も何人か含まれている。実際治療に用いるため、あるいは患者に適切なアドバイスをするため勉強に来た、というのが主な動機だった。

Dawes 氏の講義は正統な日本漢方の概論だった。中医色はなく、漢方の歴史に始まり気血水・陰陽・虚実・表裏・寒熱の概念を説明し、傷寒論を引用しながら三陰三陽について論じ、代表的な処方と腹症を要領よく解説した。現代医学の立場からの解釈を加えることも無く、基礎・臨床研究の話も一切なかったが、参加者はそれを別に不満に思う様子も無く熱心に耳を傾けノートを取り、米国人らしく活発に質問を行った。一部の参加者は既に予備知識があるらしく、日本の漢方使用は柴胡剤に偏っているそうだが本当か、それはなぜか、という耳の痛い質問をする者もあった。大勢の米国人が漢方の考え方に沿ってそのまま漢方を理解しようとしているさまには感慨を覚えた。

昼食時、数人の出席者とともに近くのレストランで食事をしながら雑談をした。彼らの言葉の端々には、現代医療の限界に対する認識と東洋医学の全人的アプローチに対する共感があり、より良い治療者でありたいという使命感があるように感じられた。このような態度は日本の東洋医学シンパの人々と驚くほど共通しており、米国の限られた一部かもしれないが、漢方を受け入れる土壌が確かに形成されつつあることを感じた。

品質と研究にも強い関心

Dawes 氏の講義は午後 3 時まで続き、そこで Wen 氏に講師を交代した。Wen 氏は中国の医師免許を有しメイヨークリニックなどでの研究歴もあり、漢方を漢方的にも科学的にも話すことができる人物である。Wen 氏は Dawes 氏とうって変わって漢方の科学的な側面、すなわち漢方製剤の製造工程、指標成分を用いた規格化、微生物・重金属汚染の排除などについて説明し、また基礎研究と臨床研究の現状について紹介した。

日本漢方の品質と研究の裏打ちは、やはり聴講者に好感を持って受け止められたように思われた。とりわけニューヨークのスローンケタリング記念がんセンターで進められている、NCI（米国国立がんセンター）の支援を受けた本草小柴胡湯の第 2 相臨床試験の話などにはみな大きな関心を示し、米国で漢方研究を行うことの重要性が示唆された^{1,2)}。

朝 9 時に始まったこの日の講演は午後 5 時までまる 1 日行われ、伝統的な日本漢方がかなり手際よく立体的に紹介された。Honso USA はこのようなセミナーを米国の各地で行っているが、出席者の少なからぬ部分が実際に漢方を使い始めるそうである。参加してみて、米国人の医療専門家の一部は伝統漢方の考えをそのまま受け入れる用意があることが実感でき、正攻法で米国に漢方を広めようとしている Honso USA の努力には共感を覚えた。

別れ際に Dawes 氏に良い講演だったと話すと、4 日後にもう一つ漢方の講演会があり、そこでまた話すことになっていると聞かされた。それが 2 つ目の漢方講演会である。

日本協会による漢方講演会

2 つ目の講演会は、最初は現地の日系新聞の広告記事で知った⁴⁾。ニューヨークの日本協会が主催し、「日本とアメリカにおける相補代替医療を探る 4 部シリーズ」なる講演や実演を行うという。日本協会とは日本文化の米国への紹介と日米親善を目的とする非営利団体で、ニューヨークに進出している日本の銀行・商社・メーカーなど大企業から寄せられる年間数億円にのぼる会費や寄付金を主な財源として運営されている³⁾。日本の各界の有名人による講演会などのイベントを絶えず開催しており、資金の潤沢すぎる公益団体が予算消化に励んでいるような印象がある。

記事によると次ページ表 1 のような 4 つのイベントが予定されている。何度見ても全体として誰に何を伝えようという企画なのかわからない。講師名、肩書、用語など、何箇所もの誤記を含め記事どおり転載したが、これらの不正確な記述がなおさら印象を貧相なものにしている。

米国人の語る漢方を聞きに行こうというのはどんな人々だろう、もし日本人が多数だとすれば何と珍妙な構図だろう、などと思い、ぜひ聞きに行きたいという気持ちは少しも起こらなかった。

しかし講師自身から誘われた義理もあり、考えを変えた。対象が今度は一般の人々なので、Dawes 氏がどんな話をするか、それが聴衆にどう受け入れられるか、そして聴衆はどんな人々だろうと、このセミナーにも出かけていった。

表 1 日系新聞の記事(原文のまま)

日本とアメリカにおける相補代替医療を探る 4 部シリーズ

- パネル・ディスカッション: 日本における相補・代替医療の役割
5月3日(月曜日)午後6時
講師 コロンビア大学・相補・代替医療センター所長 フレッド・クロネンバーグ氏
東京都老人医療センター院長 折茂肇氏
気功師 鈴木秀天氏
鍼灸師 安野富美子氏
- ワークショップ: 気功
5月4日(火曜日)午前10時30分から正午
講師 気功師 鈴木秀天氏
- 講演会: 日本の漢方と漢方治療
5月27日(木曜日)午後6時30分
講師 ハーブ研究家 スーザン・ウィード氏
太平洋カレッジ東洋医学臨床医学教授 ナイジェル・ドーズ氏
- 著名人講演会シリーズ: 久司道夫氏=マイクロバイोटニックからの健康へのアプローチ
6月15日(火曜日)午後6時30分
講師 クシ・インスティテュート・オブ・マイクロバイオテックス 創立者・会長・久司道夫氏

一般の米国人も漢方治療に関心

日本協会はマンハッタンの国連ビルの近くにある。開始時間である午後6時30分の10分ほど前に日本協会のビルに着いた。参加費10ドルを払い講演会場に入ると、既に80人ほどの聴衆が集まっていた。アジア系は全体の2割ほどしかおらず、講演会に名を借りたニューヨーク駐在日本人の社交の場ではないかという想像は完全に的外れだった。仕事帰りらしいビジネスマンの姿もちらほら見られたが、年代は2・30代の若い人がやや多めで、しかも女性が2対1くらいの比率が多い。若い女性は一般に補完代替医療に対し親和性が高いことを考えると、このような聴衆が集まることも納得は行く。

まずDowes氏が演壇に立った。一般の人が相手なので講演内容はそれなりに噛み砕いたものだった。漢方の歴史や漢方の考え方について要点をさらりと話し、今回は漢方製剤の品質面や基礎・臨床研究についても触れながら、漢方は伝統に基づきながらも科学にも支えられていることを伝えた。聴衆は熱心に講演に耳を傾け、質疑の時間になると競うように質問した。自分や家族の疾患に対するアドバイスを求めるものが多く、マンハッタンではどこに行けば純正な漢方治療が受けられるか、という直截な質問もあった。市民は漢方論ではなく現実の漢方治療を求めているのだな、と印象深く聞き入った。

補完代替医療ブームの底の浅さも

しかしこの心地よい気分は長く続かなかった。次の講演がDawes氏のメッセージにまったく逆行するものだったのだ。講師は60年代のヒッピー的サブカルチャーのままに生きてきたような60歳前後の女性で、ハーブの伝道者としてその道ではカリスマのようにあがめる人々もいるらしい。彼女の講演内容は漢方とは何の関係も無いばかりか、自然を無原則に賛美し科学を過小評価する類のものだった。

講師はDowes氏が話した漢方製剤の品質管理や研究についてまったく無意味なことと笑い飛ばし、道に生えているあれこれの草を煎じて飲めばいろいろな病気が治る、という話をした。歌を織り交ぜたり薬草見本を会場に回したり、非常に場慣れしたこの講師のパフォーマンスによって漢方の話は完全に霞

んでしまった。

これほど方向性もレベルも違う講師を並べてしまうあたり、講演会の企画者がこのテーマも講師もあまり理解していないことが伺われる。4つのイベント全体を見ても寄せ集めの感が拭えない。どういう動機と経緯によってこの一連のイベントが企画されたのか知る由もないが、一応これは米国における補完代替医療ブームのひとつの反映であると言うことはできても、深みを伴うものとはとても言えない。米国の補完代替医療ブームの中には、このような皮相的な部分もあることも忘れるわけにはいかない。

ともあれ、こういう講演会がニューヨークで企画され漢方も取り上げられること、それを聞きたくて一般の米国人が集まること、しかし玉石混淆の中で扱われてしまうこと、これらすべてが漢方の現在位置を示しているのだろう。

漢方が目指しているものと共通する、全人的な自然な治療を求めている人々が、医療専門家と一般人を問わず、米国人の中に確かに増加してきていることは間違いない。これらの人々は既に漢方を受け入れるだけの用意ができている。問題は、われわれがそれらの人々に漢方をもたらすことができるかどうかである。本草製薬とごく限られた数の医師・鍼灸師が米国にあってその仕事をしているものの、米国はあまりに大きく、道は遥かである。

参考

- 1) Clinical Trials. Gov.: Sho-Saiko-To Following Removal of Liver Cancer By Embolization in Treating Patients With Liver Cancer That Cannot Be Surgically Removed. <http://clinicaltrials.gov/ct/show/NCT00040898?order=1> September 11, 2004
- 2) Memorial Sloan-Kettering Cancer Center. Find A Clinical Trial: Phase II Study of Sho-saiko-to in Patients with Chronic Hepatitis C Who Cannot Use Interferon. <http://www.mskcc.org/mskcc/html/2270.cfm?IRBNO=02-073> August 31, 2004
- 3) Japan Society. About Japan Society. Summary in Japanese. http://www.japansociety.org/about/ar2002_03jpn.pdf/ August 31, 2004
- 4) 週刊 NY 生活 2004年(平成16年)5月1日号, NY 生活プレス社, New York